

令和三年三月

島根大学法文学部紀要言語文化学科編 島大言語文化 第五十号 抜刷

訳注 『出雲名勝摘要』(八)・補注

要
木
純
一

訳注『出雲名勝摘要』（八）・補注

要 木 純 一

【承前】
妹尾春江画

【注】妹尾春江―この本の挿絵を描いた、妹尾春江については、桑原羊次郎『島根県画人伝』に「錦織霞江の門人。松江市藪の町住。明治十四年歿、享年詳らかならず」とある。雨森精翁の実家である妹尾家縁者か。島根県地図作成にも関わっていたらしい。「はるえ」とよむべきかもしれない。『松江市史』（昭和十六年）第五章 維新以後 第三節 区及び郡治時代 廿五 史籍の編纂 「島根県にては、明治五年、桃好裕、妹尾春江の二名に、県地理図誌編修の事を命じ、其の十一月に（諸記録の収集を命ぜられて）、一人は国内を巡歴して調査したが、「地理図誌」は未成に終わった。また、『島根県史』（昭和四年）第八卷の附録には、妹尾春江の製作した「荒隈城墟」、「白鹿城墟」、「忠山城墟」、「真山城墟」の絵が載っている。写真注に明治十四年六月一日の日付がある。没後に県庁に提出されたものか。おそらく、『出雲名勝摘要』と前後して書かれたもので、この書の挿絵と、皴法等独特の筆致が一致する。

出雲名勝摘要卷之上 終

【注】卷之上―卷之下が発行予定であったことが分かる。管見の及ぶ限り、原稿等の形跡は見当たらなかった。

【奥付】

めいじじゅうさんねんさんがつごにちはんけんめんきよ
 明治十三年三月五日版權免許
 どうじゅうよねんぐかつこくせいしゅうほん
 同十四年六月刻成出版

【注】版權免許—明治二年、五年、八年の出版条例により、奥付の書式は大体このような形式、用語に統一された。まずは、県庁等を通じて、内務省等に出版の申請をした上で、許可を得た上で、半年から一年後に出版するのが通例のようである。刻成出版—出版条例で定められた用語。この書の場合は、活字版と違って、実際に版木に彫つて、刷り上げたことを指すであらう。

へんしゅうにんしまねけんへいみん
 編輯人島根県平民

ほしのぶんしゅう
 星野文淑

いずものくにしまねぐんにしちやまろつびやくはらじゅうはちばんち
 出雲国島根郡西茶町六百八十八番地

【注】平民—平民・士族の別は、明治初期の奥付には必須。星野文淑—ふみよし、ふみとし等で、日常では呼ばれていたと思うが、漢詩文関係では音読みが通用したのではないかと思う。根拠はない。

しめつばんにんどう
 出版人同

そのやまきざえもん
 園山喜三右衛門

どうこくおおうんほんまちごばんち
 同国意宇郡本町五番地

【注】同—星野文淑と同様に、平民であるということ。 同国—出雲国。

売弘所 うりひろめどころ
かわおかせいすけ
川岡清助 かわおかせいすけ
いちろうじや
一年舎 いちねんしゃ
稲吉吉蔵 いなよしきちざう
有田伝助 ありたでんすけ
西尾佐助 にしおさすけ
飯塚宗三郎 いづかむねさぶろう
石原伝吉 いしはらでんきち
藤井猪之助 ふじいのすけ
小西宗十郎 こにしそうじゅうろう
足立 あだち
今井兼文 いまいかねふみ
村上齋次郎 むらかみさいじろう
高島晋太郎 たかしましんたろう
遠藤文九郎 えんどうぶんくろう

【注】売弘所―書籍取扱店。当時奥付通用の言い方。出版資金の出資もあったか。他書の奥付等により、川岡・一年舎・稲吉・有田は松江、西尾は平田（現出雲市平田町）、飯塚・石原は今市（現出雲市今市町）、足立は安来、今井・村上・高島・遠藤は米子の書店であることが分かる。藤井・小西は不明。川岡清助―当時の書肆は天神町にあった。後に地方政治家としても活躍。『島根県案内誌』（国粹新聞社 昭和十二年）松江市会議員 川岡清助氏の項に依れば、「氏は慶応元年七月生れ、先妻キクノの入夫となり川岡家を継ぎ前名幸太郎を改め清助を襲名し川岡家五代の

主となり、夙に碩儒内村鱸香及び河合篤敬等について漢学を究め、県立松江中学校に学ぶ、氏は明晰なる頭脳を有し、明治の初期各般の制度改革のため町村事務の不便を慮り県の布達書を令訓類纂の詳細浩瀚なものを編輯刊行し各町村役場に備付せしめ、また小学校の教材用として県の史蹟及び郷土地理、県専用の習字本其他各般に亘り三十餘種を發行し、地方教育上に貢献し、更に同四十年東宮殿下行啓に際し、県史及び県の精図を出版し御台覧の光榮に浴し、其他県市教育上の施設に犠牲を払ひたるものは実に枚挙に遑がない位である。明治二十二年市制施行以来先考清助氏市會議員に当選次で再選物故後、同三十一年家督相続同年市會議員に選ばれ爾來累選し、茲に三十有餘年間副議長參事會員等に推され敏腕を揮ひ、市政の生字引としてなくてはならぬ宝物とされてゐる。また松江商工會議所書記長及び商工會議所議員として二十有年間市実業界に献身的努力を怠らず其の功勞も亦著しきものあり。また県會議員に列し日露戦役直後県知事の囑託をうけて、鮮、臺灣、北海道等の視察を遂げ大に県実業界に資し、また都市計画島根地方委員に推され松江築港の完成、市内道路の拡大、舗装、競馬場、運動場、公会堂等の新設、白濁末次大火災地の区画整理等に尽瘁し、また營業稅調査委員、土地賃貸價格調査員等幾多の公職に選ばれ特に松江片倉製糸株式会社創立の如きは氏の手腕に待つものが多い。夙に白濁教育会を組織し、県下に率先して私立白濁幼稚園を創立し幼児教育の範を垂る。また常に筆硯に親しみ書をよくし雄渾を以てしられ碧梧と号す。同家は書籍及び文具樂器等を販売し、県下書籍商会の先駆たり曩に本県書籍商組合長に推さるゝこと多年、現に顧問たり。実業界に於ても政界にも重鎮として最高顧問たり。」一年舎—松江天神町にあつた書肆。『出雲詩綜』（横山耐雪著）小伝によれば、主人は横説山。漢詩人でもあつた。「明治十五・六年の交に没す。年六十餘」とあるので、本書出版時は存命。漢詩集や法律解説書など、明治初期の松江で多数の本を出版した。稲吉吉蔵—天神町にあつた書肆就将堂店主。有田伝助—末次本町に書肆があつた。後に、有斐堂を名乗る。今井兼文—一八二八—一九〇一。明治時代の実業家。備前岡山藩医の子。長崎でまなび、安政四年伯耆米子で儒医となる。明治五年今井郁文堂（現今井書店）を創業。

○『虎列刺予防論解』 明治十三年七月十七日翻刻御届 園山喜三右衛門川岡清助翻刻

売弘書林 松江 一年舎 全 稻吉吉造 全 有田伝助 平田 西尾佐助 全 藤井伝一郎 今市 飯塚惣三郎 全 市原伝吉 掛合 日森文太郎 米子 高島晋太郎 米子 今井兼文 全 村上齋次郎 全 遠藤文九郎 倉吉 中村世平 鳥取 横山安次郎 浜田 安達幾太郎 大田 和田武吉 大森 影本大吉

○『島根県町村名』 明治十一年六月出版御届 編纂兼出版人（島根県士族）生松彦市（出雲国第三区内中原町）、発売人（同県平民）園山喜三右衛門（同国第六区本町）
売弘所 川岡清輔（出雲国第六区天神町）・稻吉吉蔵（同）・一年舎（同）・有田伝助（同国第五区本町）・松本文助（同）・曾田喜八郎（同国第四区末次町）・藤井伝助（同国第五十四区平田町）・西尾佐助（同）・飯塚宗三郎（同国第四十六区今市町）・高島雄四郎（伯爵国第十三大区米子）。

【補注】

※『出雲名勝摘要』編者である、星野文淑（成章）の墓誌銘を、彼の師内村鱸香（篤斐）が書いている。墓誌銘に依れば、星野の墓が木次のどこかにあるはずだが、未だ見つけるに至っていない。『大原郡誌』（昭和十一年）引用の碑銘を紹介する。明らかな誤字を訂正し、訓読を施した。

星野成章碑銘

星野成章、歿矣。既葬於木次某地焉。其友人石橋喜市等、欲樹碑、勒履歷、以不朽之、乃囑余作文。初成章之入門也、在慶応丙寅春正月、始十歳、其為人、温厚篤実、無戲言、無戲行。孜孜勤学不怠、其授句読於同学中幼小者、不誤音訓、懇到周密、人莫不敬。当維新之際、改制制之時、嘗為小学校所雇、教六歳幼児啓其蒙、大有功、人咸感服焉。後入広島県師範学校修業、同学頗称其性行。帰県之後、為三保小学校訓導。及辞也、人止之、不可而去、又為木次小学校訓導。其教育之勤劳、児童之勉進、日月見其功、而及聞其死也、遠近莫不惜之者。成章幼名文淑、後改星

煥、成章其字也。号鱸江。松江人醫師文瑞之子也。自安政丁巳閏五月生。至明治二十年四月、易簀、享年三十一。有子二人、男曰赫、始三歳。女子尚幼。所著出雲史略及出雲名勝摘要。如出雲史略、則其以有益小学也。官有賞焉。

銘曰

若人胡薄祐 若人胡短命 嗚呼身有死 声名弥隆盛

明治二十年六月 内村篤斐 撰

【訓読】星野成章碑銘

星野成章、歿す矣。既に木次某地に（於）葬る焉。其の友人、石橋喜市等、碑を樹て、履歴を勒して、以て之を不朽ならしめんと欲す。乃ち余に囑して文を作らしむ。初め成章の（之）我が門に入る也、慶応丙寅（二一年一八六六）春正月に在り、始めて十歳。其の人と為りは、温厚篤実、戲言無く、戲行無し。孜孜勤学して怠らず、其の句読を同学中幼小者に（於）授くるや、音訓を誤らず、懇到にして周密、人敬せざ（不）る莫し。維新の（之）際、学制を改むるの（之）時に当たつて、嘗て小学校の雇う所と為る。六歳の幼児に教えて、其の蒙を啓くこと、大いに功有り。人咸な感服す（焉）。後に広島県師範学校に入りて修業す。同学頗る其の性行を称す。帰県の（之）後、三保小学校（現浜田市一九九七年閉校）訓導為り。辞するに及びて也、人之を止むるも可かずして而して去る。又木次小学校訓導為り。其の教育の（之）勤勞、児童の（之）勉進は、日月其の功を見る。而して其の死を聞くに及びて也、遠近之を惜しまざ（不）る者莫し。成章幼名は文淑、後に星煥に改む。成章は其の字也。鱸江と号す。松江の人。医師文瑞の（之）子也。安政丁巳（四年 一八五七）閏五月に生れて自り、明治二十年（一八九七）四月に易簀するに至るまで、享年三十一。子二人有り、男は赫と曰い、始めて三歳。女子は尚幼し。著す所は、出雲史略及び出雲名勝摘要。出雲史略の如きは、則ち其の小学に益有るを以て也、官として賞有り焉。

銘に曰く

若（かくのごと）き人胡ぞ薄祐なる 若（かくのごと）き人胡ぞ短命なる 嗚呼身は死する有るも 声名弥よ隆盛なり

明治二十四年六月 内村篤斐 撰

※たまたま、『松江新聞』明治十三年十一月十七日版に星野に関する記事を見つけたので以下に整理して引用する。
「西茶町の星野文淑氏が発企にて、相談会と名づけ、毎月一回づつ会集して、専ら商業教育のことを懇談し、傍ら親睦を厚うするの目的にて、同志の誘導方を同町戸長伊達某に依頼せし処、某も大いに之を賛成し、早速この事に着手されし由、尤も先づ同町茶町芋町末次町片原町の五ヶ町と限り置き、漸次盛大なるに至れば、随いてその区域を拡むるの見込なり」と。

※佐々木高綱墓に関して、『松江市史』の善光寺にかかる記述を引用したが、紙幅の都合で、その碑銘は割愛した。他書に見えないもので、本文を読むためにも必須であるので、以下に引用する。訓読を附した。

高綱廟碑之銘

当寺開山心瀧院殿正阿弥陀仏法嶺源性大居士者、宇多天皇九代之後裔佐々木秀義四男左衛門尉源高綱也、昔時高綱治承之初、従右大将頼朝撃於判官兼高権頭信遠、寿永三年宇治川之先登其餘有数度之戦功、震英名於天下、伝功名於万世矣、于然宿世之勝因乎、正治元年頼朝公薨御之後、頻觀於世間之無常、悔於己身罪業、忽然遁世之心發起、即託所領於妻子、独歩赴于南都、詣于東大寺大勸進重源上人之座下、剃除於煩惱之結髮、号心瀧焉。重源上人尚親教示出離之要路、心瀧法喜涙沾衣、注心於西刹之蓮臺、投身於他力之願海、偏決婦称名一行四威儀唯念仏三昧也。于爰其頃於鎌倉御所、頼朝公之守本尊金像阿弥陀如来為盜賊被奪、因茲二位禅尼命于四方、雖尋之未曾知其所在、于時高綱入道在於南都憶之、我幸遁世之身、諸国行脚而奉尋尊像發願、正治元年春立出於南都、歩月御風飄然経歴于諸州、至于信州善光寺、七日七夜籠居于如来前仰撰取之光益、且祈知奉尋尊像之所在、満七日暁夢中蒙於如来告勅、金像知沈在于鎌倉比企谷、再立還于鎌倉、自比企谷之泥中奉得金像歡喜不斜、即任善光寺如来告勅、直奉負於尊像復赴西国、至于当出雲国、宿此意宇郡、夜尊像告勅高綱入道曰、当国当所是吾有縁之地也、汝宮草堂安置於吾、使此地之衆生結縁儼然、感靈夢因留此地、遍勸誘四衆以草創一字蘭若、奉安置於尊像矣、抑此尊像者天竺月蓋長者奉鑄弥陀三体之其一

体、閻浮檀金尊容而則信州善光寺如来同体也、此故草創寺名善光寺、高綱入道自住持而生涯供奉于尊像、終積念仏之功、建保四年春二月十五日、行年七十五歲而遂大往生矣、因之葬此地、号心瀧院殿法嶺源性大居士、仰為善光寺之開山師焉、其後經七十餘年之星霜、時宗元祖一遍上人遊行於六十餘州、弘安八年之秋至于當雲州遍賦与決定往生之神符焉、爾時善光寺住僧婦依一遍上人、則招待于善光寺、因之上人誘引時衆於如来前、三七日之間勤修於踊躍念仏、于時結縁之道俗如雲集、猶草木有法喜之相乎、于然勤行二七日夜、高綱入道廟所頻鳴動、翌朝到見墳墓悉崩、一箇髑髏涌出焉、時衆驚怪而持來捧上人、感歎曰善哉善哉、高綱入道之魂魄隨喜、於此念仏勤行、其相現白骨涌出如斯、教示時衆慇懃回向之更諡正阿弥陀仏、尚詠一首和歌以追善之、其和歌曰

朽モセテ世二高綱ノ名ニモナオ

導キ給ヘ南無阿弥陀仏

此時此靈瑞見聞之諸人渴仰愈深、住僧之帰敬殊厚、而且請使善光寺永為時宗之門葉、上人歡喜許諾、即加末寺之一箇、為神勅法灯之道場矣、自爾數百歲中雖有興廢、高綱入道髑髏尚不朽伝于今、以証澆季之信、故群生之進歩絡繹繼本尊之靈光、赫乎祇林自繁茂焉、是正開山正阿弥陀仏之餘德此可觀哉、今纔略記於其行業之始末以銘于不朽爾
現住遊行四十一代之末弟

一寮(生同上野州勢多郡新田孫々岩松氏)

当寺二十七世中興貞徳院覺阿上人大和尚誌置焉

維時元祿六龍集癸酉秋吉辰

右覺阿上人、造塔室、以雖顯碑之銘石、旧字泯難見明此、其阿入院而考其始末、正其異同以修補之

当寺三十世其阿上人快澄之

于時宝曆十二壬午益夏下弦

【訓読】 高綱廟碑之銘

当寺開山之心瀧院殿正阿弥陀仏法嶺源性大居士なる者は、宇多天皇九代之後裔佐々木秀義の四男左衛門尉源高綱

也。昔時高綱は治承之初、右大将頼朝に従つて判官兼高、権頭信遠を撃ち、寿永三年宇治川之先登、其の餘數度之戰功有り、英名を天下に震わし、功名を万世に伝う矣。然るに于いて宿世之勝因か、正治元年頼朝公薨御び後、頻りに世間の無常を觀じ、己のが身の罪業を悔い、忽然として遁世の心發起し、即ち所領を妻子に託して、独り歩んで南都に赴き、東大寺大勧進重源上人の座下に詣り、煩惱の結髪を剃除し、心瀧と号す焉。重源上人は尚お親しく出離の要路を教示す。心瀧法喜して涙衣を沾し、心を西刹の蓮臺に注ぎ、身を他力の願海に投げ、偏へに称名一行に帰せんことを決す。四威儀は唯だ念仏三昧のみ也。爰に于いて其の頃鎌倉御所に於いて、頼朝公の守り本尊金像阿弥陀如来盜賊の為に奪わる。茲に因りて二位の禅尼四方に命ず。之を尋ぬと雖も、未だ曾て其の所在を知らず。時に高綱入道南都に在りて之を憾みとし、我遁世の身を幸いとして、諸国行脚して尊像を尋ね奉らんと發願し、正治元年春立つて南都より出で、月を歩み風を御して飄然として諸州を経歴し、信州善光寺に至る。七日七夜如来の前に籠居して撰取の光益を仰ぎ、且つ尋ね奉る尊像の所在を知らんことを祈る。満七日の曉夢中に如来の告勅を蒙り、金像は沈みて鎌倉の比企谷に在るを知り、再び立つて鎌倉に還り、比企谷の泥中自り金像を得奉り歛喜斜めならず、即ち善光寺如来の告勅に任せて、直ちに尊像を負い奉り復た西国に赴く。当出雲国に至り、此の意宇郡に宿る。夜尊像高綱入道に告勅して曰く、当国当所は是れ吾が有縁の地也、汝草堂を営みて吾を安置し、此地の衆生をして結縁儼然なら使めよ、と。靈夢に感じて因りて此の地に留まり、遍く四衆を勧誘して以て一字の蘭若を草創し、尊像を安置し奉る矣。抑も此尊像なる者は天竺の月蓋長者弥陀三体を鑄奉るの其の一体、閻浮檀金の尊容にして而して則ち信州善光寺如来の同体也。此の故に草創の寺善光寺と名づく。高綱入道は住持する自りして生涯尊像を供奉し、終に念仏の功を積む。建保四年春二月十五日、行年七十五歳にして遂に大往生す矣。之に因つて此の地に葬り、心瀧院殿法嶺源性大居士と号し、仰ぎて善光寺の開山師と為す焉。其の後七十餘年の星霜を経て、時宗元祖の一遍上人六十餘州に遊行し、弘安八年の秋当雲州に至り遍く決定往生の神符を賦与す焉。爾の時善光寺の住僧一遍上人に帰依し、則ち善光寺に招待す。之に因つて上人時衆を如来の前に誘引し、三七日之間踊躍念仏を勤修す。時に結縁之道俗は雲の如く集り、猶お草木すら法喜の相有る乎。然るに于いて勤行二七日の夜、高綱入道の廟所頻りに鳴動し、翌朝到りて墳墓悉く崩るる

を見るに、一箇の髑髏涌出す焉。時衆驚怪して持ち来りて上人に捧ぐ。感歎して曰く、善哉善哉、高綱入道の魂魄隨喜し、此に於いて念仏勤行し、其の白骨涌出するを相い現わすこと斯くの如し、と。時衆に教示して慇懃に之を回向す。更に正阿弥陀仏と諡し、尚お一首の和歌を詠じて以て之を追善す。其の和歌に曰く、

朽ちもせで世に高綱の名にもなお

導き給へ南無阿弥陀仏

此の時此の靈瑞見聞の諸人渴仰すること愈よ深く、住僧の帰敬殊に厚し。而して且つ請いて善光寺をして永く時宗の門葉為ら使む。上人歡喜して許諾し、即ち末寺の一箇に加え、神勅法灯の道場為らしむ矣、爾れ自り數百歳中興廢有りと雖も、高綱入道の髑髏は尚お朽ちずして今に伝わり、以て澆季の信を証す。故に群生の歩を進むること絡繹として本尊の靈光を継ぎ、赫乎たる祇林自ら繁茂す焉。是れ正に開山正阿弥陀仏の餘德、此れ觀る可き哉。今纔かに其の行業の始末を略記して以て不朽を銘する爾。

現住遊行四十一代之末弟

一寮（生同上野州勢多郡新田孫々岩松氏）

当寺二十七世中興貞徳院覺阿上人和尙誌して置く焉

維れ時に元禄六龍集癸酉秋吉辰

右覺阿上人、塔室を造り、碑の銘石を顕すと雖も、旧字泯びて見難きを以て此れを明かにし、其阿院に入りて其の始末を考え、其の異同を正して以て之を修補す。

当寺三十世其阿上人快澄之

時に于いて宝曆十二壬午益夏下弦

*以下は二〇二〇年十二月六日に鳥根大学で開催された、「相見香雨没後五〇年記念シンポジウム」で、私が行った

報告の梗概を文字におこしたものである。日本美術研究家、相見香雨が育った明治初期松江の文芸について述べている。『出雲名勝摘要』が出版された背景に関わることなので、参考に供したい。

近代松江における漢詩文化

要木純一（島根大学法文学部教授）

今回のシンポジウムは、あまりに私の専門外のことなので、何をしゃべればよいのか、苦しんでいるところですが、私は、中国文学専門で、たまたま縁あって、松江の明治初期の漢詩について調査研究をしております。相見香雨の父、相見淞雨という人が、この時期の松江で漢詩、篆刻等、文芸上の重要人物であったので、この講演を依頼されたのですが、淞雨についてはすでに村角様（村上紀子氏松江市史料編纂課専門調査員）が、これ以上はないほどに調べておられますし、香雨や日本絵画のことは何も知らない、どうしたらいいんだという感じで、今日までずっと悩んでいたわけです。香雨が、この父の教育のもと、どのような青少年時代を過ごしたか、を語れることができればいいのですが、あいにく、そのような回想はほとんど残っていない。雨森精翁から漢詩を作る際の正式な名前もつけてもらっており（「相見淞雨碑」には「守時」とあり）、香雨も漢詩文の素養があったはずで、漢詩も作ろうと思えば作れたはずですが、それも残っていない。というわけで、村角様の所説に導かれつつ、落ち穂拾いのようなことをして、お茶を濁させてもいます。

1. 全国でも有数の漢詩創作の中心地・松江

江戸時代、米の生産に加えて、鉱山、森林の開発や、北前船と呼ばれる海運の発達などにより、松江は日本海側の経

済中心地の一つとなったのですが、維新後の松江でも、その興隆は続き、日本の都市で、人口トップテンに入るような町であったことは、よく言われているところです。その松江が幕末から明治にかけて、全国でも有数の漢詩創作の中心地であったことは、考えてみれば当たり前のことで、その具体的な事例を、ここ数年、私は紹介してきました。松江には、漢詩に限らず、広く文化に興味をもつ知識人（武士、商人、僧侶）が多かった。そのような環境の中で、香雨が、育ったことが、彼の学問のバックボーンにあるであろうことは、まちがいないでしょう。

・雨森精翁、河野天鱗、内村鱸香の指導

漢学、漢詩文の方では、幕末すでに全国にその名をとどろかしていた、雨森精翁、河野天鱗、内村鱸香といった人が、塾を開いたりして、後進の指導にあたりました。松江も明治十年代から出版が盛んになりましたが、彼ら本人及び弟子達の漢詩を集めた本が次々と出版されました。私のただいまの仕事は、それらをできるだけ翻刻し、必要な注釈を加えて、後世に残すことが中心です。その中から、相見淞雨の作品を取り上げましょう。

・相見淞雨の作品

まずは、香雨のお父さんの、相見淞雨の作品について。当時、松江で出版された『風月小誌』という、漢詩・和歌の文芸誌に載っているものです（要木純一 二〇一二『明治期の松江と漢詩―明治初期の出雲漢詩壇』今井出版より）。

春夜観梅

相見淞雨

香雪霏霏夜洒袍

香雪霏霏として夜袍に洒ぎ

満身清気勸春醪

満身の清気春醪を勧む

忽然呼快人抛蓋

忽然として快しと呼んで人蓋を抛つ

月出梅花三尺高

梅花より出ること三尺の高さなり

まあ、酒を飲みながら、梅の花を觀賞する、よくあるパターンの漢詩ですが、転句の人を驚かす、印象的な表現、そして、その謎の理由である結句の、絵画的な描写、淞雨は漢詩の方は得意でなかったと言われていますが、成功しているかどうかはともかく、少なくとも、これまででなされなかった表現をめざす、並々ならぬ意欲が感じられます。

・入手した清朝絵画を詠んだ詩（平賀静遠）

香雨の、美術に対する審美眼を養ったものとして、当時の松江の知識人達の、絵画に対する関心の深さがあると思われまます。このことに関して、詩を一首紹介しましょう。今では忘れられています、明治初期、出雲の漢詩壇で活躍した人に、平賀静遠がいました。松江藩の家老の一人（家老並、仕置添役）ですが、隠岐騒動の責任を取らされ、幽閉蟄居。明治になって解放されてからは、ひたすら詩にのめり込んだ人です。その人が、おそらく明治十年代、同時代清朝の絵画を手に入れ、喜んで詠んだ詩があります（要木前掲書）。

獲清人張庚水墨山水幅喜而有作 平賀静遠

清人張庚水墨山水幅を獲たり喜びて而して作有り

隔水青山鬱崩岩

墨水を隔つる青山鬱として崩岩たり

一片行雲逐飛翼

一片の行雲飛翼を逐う

烟鎖樓閣有又無

烟樓閣を鎖ざして有りて又無し

毫端變化妙無極

毫端の變化妙たること極り無し

誰居画之張瓜田

誰か（居）之を画く張瓜田

秀韻堪看稽古力

秀韻看るに堪えたり稽古の力

君不見世間多少丹青家 君見ずや世間多少の丹青家

胸書無卷浪弄墨 胸書卷無く浪りに墨を弄するを

張庚は、清朝の画家、美術評論家として著名な人ですが、この絵がどんな絵か、今もどこかに残っているかよく知りません。ただ、大切なことは、長崎や東京、大阪、京都以外にも、同時代の中国絵画に興味を持ち、本物か偽物か知りませんが、とにかく入手している人が松江にいたということ（他の地方も同様なのか、浅学な私には分かりませんが）。そして、絵画をものするには、古典特に漢詩文をたくさん学ばなければだめだということが共通認識として、あっただろうということ（「君見ずや世間多少の丹青家（画家）、胸書無く浪りに墨を弄するを」。松江は現在に至るまで、立身出世には何の役にも立たない、学問や芸術を愛する気風が続いているのは素晴らしいこと、この環境があったからこそ、香雨が生まれたのではないかと思えます。私の故郷の山口などは、貧乏だったためか、実学志向が強く、松江が本当にうらやましくなります。松江は、香雨に限らず、今に至るまで、学者、芸術家が輩出しているのは、驚くべきことです。香雨の専門の日本絵画についても、名品に触れる機会が多かったろうし、何よりも、絵画論、文学論が活発に知識人の間で取り交わされ、それを耳学問にして、香雨の芸術観が育てられたのではないか、と推測します。

2. 出版文化

このように、芸術を愛好する知識人の需要に応じて、明治初期の松江はかなり出版文化が発達していたように見受けられます。それも、実学的なもの、西洋の知識よりも、漢詩のような、文学関係の出版物が多いのが特徴です。

その出版物には、多く、挿絵も入っている。それを画いたのも、松江の画家達です。私には、絵の善し悪しはわかりませんが、少なくとも、新時代にあつて、個性的な表現を目指したらしいように思います。

・『出雲名勝摘要』——妹尾春江の名所図絵

二つほど、紹介しましょう。まず、出雲地方の名所案内に、漢詩・和歌・俳諧を附した『出雲名勝摘要』（星野文淑編、明治十四年）。妹尾春江という人の挿絵。この人、他の本でも挿絵を描いている人です。パースが狂っているような気がしますが、味があると評価してもいいでしょうか。この本には、当時の南画家の第一人者、田能村直入の漢詩が載っています。この田能村直入の松江訪問に関しては、後ほど触れます。

（『出雲名勝摘要』より妹尾春江挿絵「鬼の舌震」、田能村直入漢詩を紹介）

・『出雲小羅浮』——天野漱石の挿絵

もう一つは、梅の詩の唱和集『出雲小羅浮』（一年舎、明治十五年）。天野漱石という、郷土美術史では割合有名な人なのですが、梅の絵の挿絵を描いています。『出雲小羅浮』は、先ほどあげた、全国的に有名な松江の詩僧、河野天鱗の梅の詩に、雨森精翁らが、唱和したものです。

3. 文人の松江訪問

江戸時代からそうでしたが、松江及び出雲地域の学芸の発展や景物の素晴らしさは、知る人ぞ知るものであって、文人達は、誘いがあれば、喜んで訪れます。毎年、一度はそのような全国的に著名な文人達が松江を長期訪問し、それが新聞記事や報告で町中に知らされます。松江の人たちにとって、これらの訪問は、一大イベントであり、お祭りのようなもの。その記憶は後々まで残ります。もちろん、京都、東京、大坂、名古屋は、毎日のように、文人達が作品を発表して、交流も活発だったでしょう。でも、あまりに当たり前になって、ありがたみが少ない。文人達の一挙手一投足が話題となり、模倣されるような、そんな地方における熱気はなかったと思います。まして、西洋文化に対する関心が強く、都市民の伝統的文芸への興味は薄れていきました。当時の見方では、「遅れた」地方にこそ、伝統文芸は、活躍の場を見いだし、明治になってから一層発展することになるのです。松江でむしろ明治以後に、漢詩が発展したのも、そういう事情があったにちがいない。文化に触れる機会が乏しいからこそ、文化に対する興味が

や募り、一つの作品について、何回も議論し、反芻し、自らの芸術観を着実にじっくりと進展させてきたのです。大量の作家、作品に接する環境では、相見香雨の鑑賞眼と伝統文化に対する興味は育たなかったのではないか、と思います。

・清朝文人の松江来訪

松江を訪問する文人には、中国当時の清朝の文人達もいました。葉松石、胡鉄梅、衛鑄生と行った人たちです。彼らは、淞雨とも交流があり、淞雨の篆刻集に序を寄せています。中国での評価は今ひとつで、中国の文化、美術史では、あまり、名が上がる人ではありません。鎖国が解け、同時代人の中国の文人が日本内地にやってきた物珍しさもあつたでしょう。でも、まあ、その影響力たるや、とくに松江では大きく、来訪に関する、新聞記事・新聞広告は、大きく掲載され、地元の知識人達と唱和した詩も、『山陰新聞』に載っています。当時の松江の中国文化に対する関心の深さ（平賀静遠が、清朝の絵画を購入して詩を詠むような）がうかがえます。

・田能村直入の山陰旅行

もちろん、日本の漢詩人、日本画家達も、松江で歓迎を受けています。揮毫を求められたり、自分の本や絵を書店で売ってもらったり、結構商売になったんじゃないでしょうか。都会では、西洋文化や新文化への傾斜が強くなって、段々見向きもされなくなったのに対して、伝統文化愛好家が根強く残る地方を回るとは、観光の楽しみも兼ねて、彼らの余生を豊かにしたことだろうと思います。

その一人に、先ほど、言及した田能村直入がいます。田能村竹田の養子で、京都で南画の学校の校長になり、明治期の伝統絵画界を先導したといつてよい文人画家ですが、毀誉褒貶も激しい人でした。

彼は画学校の校長になる前に、山陰に二度にわたって旅行しています。当時の大地主、富豪絲原家等の援助があつたといえます。松江、出雲の人も、大いに歓迎して、当時の松江の美術、文化に与えた影響は多大であつたようで、今も直入の作品が、そこかしこに残っているそうです。その中には偽物や模倣作も多いそうですが、模倣を含めて、

影響が大きいということは言えそうです。ただ、歓迎一方ではなく、批判する向きもあった。これが大切で、一つの文化現象に対して、賛否含めて、多くの人が噂話や議論に花咲かせるような、そういう環境だったということです。その中心になったのが、漢詩を作れるような、知識人達であり、その中の一人として、淞雨もあり、青少年の香雨もあったでしょう。

絵画は、古典や漢学の教養に裏打ちされたものでなければならぬ。それが、田能村直入にはない、という批判もされました。明治中期に松江では、剪淞吟社という漢詩結社が作られ、松江は、全国でも有数の漢詩創作が盛んな土地になったのですが、その結社の大正時代に編まれた機関誌『剪淞詩文』で、懐古談として、田能村直入の松江訪問に関する逸事を引いております。

明治十二年秋、田能村直入遊華藏寺、賦二絶句、示桂洲上人。上人直把筆改数字、且曰「子今以海内画伯自任、而詩之拙如此。有何面目見乃父于地下哉」。因諄諄訓戒。時深秋霜氣逼肌、擁一小爐对坐。及四更、直入愧謝。留三葉而去。上人以二葉与人、曰「我豈忍留若輩之俗筆、汚名利哉。特存一葉者、欲以警来者爾」。今日耳食之徒、不辨皂白、争擲千金購直入画、為可笑也。

（『剪淞詩文』第二号附録「咳唾餘珠」、大正六年）

明治十二年秋、田能村直入華藏寺に遊び、二絶句を賦して、桂洲上人に示す。上人は直ちに筆を把つて数字を改め、且つ曰く「子は今海内の画伯を以て自ら任ずるも、而して詩之拙なること此くの如し。何の面目有りてか乃の父に地下に見えん哉」。因りて諄諄として訓戒す。時に深秋の霜氣肌に逼る、一小爐を擁して对坐す。四更に及び、直入愧謝す。三葉を留めて去る。上人二葉を以て人に与えて曰く「我豈に忍んで若（かくのごと）き輩の俗筆を留め、名利を汚さん哉。特に一葉を存する者は、以て来者を警しむることを欲する爾」。今日耳食之徒、皂白を辨せず、争いて千金を擲つて直入の画を購うは、笑う可しと為す也。

田能村直入が、松江枕木山の華藏寺の和尚に、差し出した漢詩の出来をけちよんけちよんにやつつけられる話です

が、この話が本当かどうかは、問題ではない。大切なのは、この話が四十年後の大正年間でも、話頭にのぼるということ、たとえフェイクニュースであろうと、一つの事件を松江の知識人が何遍も何遍も反芻し、議論したのであるということがかがえるということです。そして、美術の価値も漢学的教養があるかどうかが大切だったということです。職人の芸術ではなく、文人の芸術が評価されるのです。このような話、ひよっとしたら、青少年の香雨の耳に入っていたのではないかと私は夢想します。証拠は全然ないんですけどね。

4. 『剪淞詩文』に記載された明治初期松江の逸事

・中村鷺山、森脇松陵に関する記述

相見淞雨とならんで、篆刻に優れていた中村鷺山、森脇松陵に関する記述松田淞雨に関する逸事も、『剪淞詩文』第一号附録「咳唾餘珠」に載っているのを、たまたま見つけましたので、ご紹介しましょう。淞雨とならんで、篆刻に優れていた中村鷺山、森脇松陵に関する記述。

中村鷺山、出雲国八束郡法吉村人、名準、字士繩、通称準一郎。又白鹿山下人。自小学教員、進為八束郡視学、後為島根県属、任農商課長。明治三十五年、病歿、年五十。為人寛厚謹嚴、学該和漢、善詩文、殊妙于篆刻。篆刻学森脇松陵、有出藍之称。与中井敬所輩訂交、為其所推。重又工狂詩。試举之。其一云、一年一年又一年、千年万年万年。年年年来年年去、去年来年是今年。其二云、春夏秋冬雨、東西南北風。看他天地氣、万国古今同。其警拔往往如此。森脇松陵、松江人。学篆刻于羽倉可亭、有名。又善詩。与劉石秋友善。松陵子淞雨、出嗣相見氏。亦善篆刻。然松陵臨終、授印刀于鷺山而瞑。蓋有所見也。淞雨頗以為憾。後發憤励精。其技大進。適清人胡鉄梅来松江曰、此地可驚嘆者三、曰松江風景、曰僧天鱗詩、曰淞雨篆刻、乃磨所携印、囑淞雨刻焉。

淞雨に関係のある後半の部分だけ訓読します。

・森脇松陵は、松江の人。篆刻を羽倉可亭に学んで、名有り。又詩に善し。劉石秋と友善たり。松陵の子の淞雨、出でて相見氏を嗣ぐ。亦た篆刻に善し。然るに松陵終に臨んで、印刀を鷺山に授けて瞑す。蓋し見る所有る也。淞雨頗る以て憾みと為す。後に發憤して励精し、其の技大いに進む。適ま清人の胡鉄梅松江に來りて曰く、「此の地

に驚嘆す可き者三、曰く、松江の風景、曰く、僧天鱗の詩、曰く、松雨の篆刻」。乃ち携うる所の印を磨き、松雨に囑して焉に刻ましむ。

松雨没後、その墓碑銘を書くことになる、篆刻のライバル中村鷲山は、松雨の実父森脇松陵の後継者になった。これを遺憾に思つた松雨が發憤した、そして、本場の清人胡鉄梅に褒められるほどになった。金儲けや立身出世に関わらない、芸術に切磋琢磨する当時の松江の知識人達、彼らの活発な文化活動がしのべれます。

・松田松雨に関する逸事

この記事に続く記事。

相見松雨と松田松雨同号。松田曾謂相見曰「君須改松雨作湘雨」。相見問何故。松田曰「予姓為松田、故号亦宜松字。君姓為相見、其用湘字当然耳。相見唾然。

相見松雨は松田松雨と号を同じうす。松田曾て相見に謂いて曰く「君須く松雨を改めて湘雨と作すべし」。相見何の故なるかを問う。松田曰く「予は姓松田為り、故に号も亦た宜しく松の字たるべし。君は姓相見為り、其の湘字を用いるは当然なる耳」。相見唾然たり。

松田松雨、全国的に名をしられた漢詩人です。のちに中国紀行詩集を出版して、さらに有名になりました。その松田松雨が先輩の相見松雨に対して、(紛らわしいので)号を相見の「相」に合わせて、湘南の湘の「湘雨」にかえろという。この、お互いに冗談が言えるような、自由闊達な雰囲気、明治初期の松江にはあったんだと思います。頑迷固陋な伝統文化墨守というのは、ちよつと違うんです。

相見松雨の篆刻集に寄せられた序には「相見湘雨」となっているものがあります。単なる間違いか、それにしても失礼なとか、思っていたんですが、今思うに、どうも、松田松雨の意見を取り入れて、自ら「湘雨」と号を変えた時期があったのではないかと。つまらんことですが、もしもそうならば、相見松雨の融通無碍な人となりによるのではないかと。香雨にとつて、少なくとも頑固親父ではなかった。芸術的、ユーモアに富んだ父親で、香雨もそれに感化されたのでは、とこれまた、妄想しております。

本当にとりとめない話になりました。相見香雨が育った明治初期の松江の文化的環境について、少しでもお役に立てれば、と思ったんですが、何分、直接の証拠も少なく、自信がありません。今回のシンポジウムをきっかけに、相見香雨の評論、日本美術、少しずつ勉強していこうと思います。そうして、また、松江の文化史を見直してみたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

本稿は、

鳥根大学法文学部山陰研究センター山陰研究共同プロジェクト

一九一三 近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置——若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究実施年度…
二〇一九～二〇二二年度 代表 要木純一

鳥根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト

一九〇二 山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト（期間…二〇一九～二〇二二年度
研究代表者 野本瑠美のち田中則雄）

科研費 基盤研究(C)

若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究——近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置

（研究課題／領域番号19K00296 二〇一九年度～期間二〇二二年度 研究代表者 要木純一）
による成果の一部分である。